

七十六年前の命と夢

福井県 北陸中学校 三年

伊部 愛唯 いべ あゆ

「将来は何になりたいの？」たくさんの人たちにそう訊かれるけれど、正直何になりたいのかまだ決めていない。

学校の社会や国語で戦争について学習しており、戦争に関するビデオも幾度となく観た。お国のためにと出征する若者や、集団疎開先で戦闘に備えた訓練をする子どもたち、また、原爆や空襲で破壊され尽くした街と被害に遭って苦しむ人々……そこに笑顔は一つもなかった。

そんな映像を観ると、いつも思うことがある。出征する若者や家族は、本当はどんな気持ちで赤紙を受け取ったのだろう……疎開してきた人たちはどんな気持ちで親元を離れ知らない土地で暮らしていたのだろうか。

きつと平和な現代を生きる私たちには分かるはずもない悲しみや苦しみがあつたはずなのに、教科書や映像では、そのほんの一部分が切りとられ、残されているだけだ。ましてや、語られることのなかった本心や、一人ひとりの「将来の夢」などは、この先もずっと知られることなく、戦火に焼き尽くされた

ままだ。戦争がなかったら叶ったかもしれない無数の夢を思うと、選んだり先延ばしにできる今の私は、本当に贅沢なのだと実感する。

贅沢と言えば、私はいつも思い出すことがある。それは祖父の口癖だ。私の祖父も祖母も戦時下に生まれた。祖母の生い立ちが複雑で、疎開中の曾祖母と疎開先の曾祖父との間に生を受けたが、終戦と共に曾祖母は单身東京に戻り、一人では育てられない曾祖父に養子に出されたらしい。一方、祖父は十分に食べることができず、栄養失調だったそうだ。だから、祖父の口癖は「こんなに残して贅沢だな。」だったし、一度も食べ残さなかった。

戦争は、私のこんなに身近な人にも傷を残している。逆に誰一人として喜びや楽しさ、嬉しさを与えられていない。そして、世界では戦火に苦しむ子どもたちが今もいる。世界で平和の声を上げ、慈しみの心を子どもたちに。そう、せめて夢を選べる贅沢だけでも。